

第4A (小) 分科会 —組織・運営に関する課題—

提案主題 小中一貫校における学校組織の活性化に向けた教頭の関わり
～教務と連携した小中協同体制づくりを通して～

司会者	日田市立石井小学校	冷川善幸
提言者	日田市立大山小学校	相良美砂子
助言者	竹田教育事務所次長兼指導課長	後藤栄治郎
記録者	日田市立東溪小学校	伊藤英二

1 協議の柱

- ・小中協同体制づくりのための教頭の関わりはどうあればよいか。

2 協議の実際

(1) 質疑・応答

- Q：P T A組織の現状 → A：素地はあり開校と同時に合同育友会へ移行した。
- Q：校内研のあり方 → A：研究内容は総合学習であり，小中の交流部分が主題である。
- Q：乗り入れ授業の頻度 → A：教科担任制。複雑で調整が重要。
- Q：会議が多いが，開催方法 → A：基本水曜日の時間を利用。短時間開催等もあり。
- Q：体力向上の連携方法 → A：中学体育教員が小学校で専科。課題の部分は授業で補う。等々，沢山出された。

(2) 運営委員会等での関わり

- ・運営委員会では校長の方針を受けて全体会議へつなぐことと，分掌リーダーと共に学校全体を見ることで，各分掌からの考えを反映させ，組織を活性化させていく必要がある。会議時間の設定も必要。

(3) 小中の文化の違いを埋めるための関わり

- ・小中一貫・連携では，中学校教員が小学校で授業することで児童の反応に癒されたり，小学校児童が教員の専門性に満足したりすることがある。小中の文化の違いを埋めるためには，同じ子どもたちに関わり，小中の教員のコミュニケーションを活発にすることが大切である。また，見通しをもった運営と，考え方の違いを埋めること，成果をフィードバックすることにより「やるべき」「やってよかった」につなぐことができる。

3 指導助言

- ・小中一貫を0からつくり上げるのは「違い」への挑戦である。学校の中にある様々な「違い」にも大変参考になる取り組みである。「違い」の克服のために，準備・動き出しの段階では，小中の中核となる人で方針や方向性を揃えるなど機動性を生み出す。ある程度軌道に乗った段階では，企画等にミドルリーダーの出番を増やし，全体の意識を変革していくことが大切。教頭の役割は，今どの段階にあり何が重点なのかを見極めること。
- ・教頭と教務の仕事の分担を予め明確にしておく。また，議題の精選，行事の仕分けに踏み込むためには，年間行事のスケジュール化の中で必要か不要かを検討したり，子どもの姿から現在の課題を明らかにしたりしていくことが肝要である。P D C A，芯の通った学校組織はツールであり，ゴールではない。目指すのは子どもの姿の変容である。